第 113 回日本泌尿器科学会総会

ダイバーシティ推進委員会企画 開催報告

第 113 回日本泌尿器科学会総会において、ダイバーシティ推進委員会企画「多様化時代にリーダーシップある医師を育てる ～その指導に愛はある！～」を開催しました。

本企画では、学会テーマである「愛と叡智」を踏まえ、多様な背景をもつ医師・医療者がともに成長できる指導、リーダーシップ、手術教育のあり方について、第 1 部から第 3 部まで多角的に考える機会となりました。

第 1 部 指導医教育コース認定プログラム

多様化時代にリーダーシップある医師を育てる ～その指導に愛はある！～

第 1 部では、東京医科大学泌尿器科の大野芳正先生、琉球大学腎泌尿器外科の芦刈明日香先生の座長のもと、3 名の先生にご講演いただきました。参加者は約117名でした。

まず、札幌医科大学泌尿器科／医療安全・病院管理学講座の西田幸代先生より、「ともに創るリーダーシップ ―泌尿器科学会の明日に向けて―」と題してご講演いただきました。日本泌尿器科学会における女性医師の増加、ロールモデルの可視化、クォータ制の意義などを通じて、これからの学会に求められるリーダーシップのあり方が示されました。リーダーシップを「役職」や「立場」だけでなく、周囲に働きかけ、ともに変化を生み出す行動として捉える視点が共有されました。

続いて、日本リーダーシップ・ウェルビーイング医学会／大阪市立総合医療センター小児集中治療部の赤嶺陽子先生より、「愛は感情ではなく選択である：奉仕の覚悟・サーバントリーダーシップと次世代に向けた Wellbeing-centered Leadership」と題してご講演いただきました。医師のリーダーシップがチームの well-being やバーンアウトに影響すること、また、リーダーのふるまいが組織文化を形成することが、サーバントリーダーシップの観点から示されました。「愛」は感情ではなく、相手の最善の利益のために選択し続ける行動であるというメッセージは、参加者に強い印象を残しました。

最後に、広島大学ハラスメント相談室の北仲千里先生より、「リーダーシップ育成（外科系育成）を取る中で起きるハラスメント　その『良かれ』は大丈夫？」と題してご講演いただきました。医療現場で起こりうるハラスメント、特に指導や教育の名のもとに生じるアカデミックハラスメントについて、具体例を交えながらわかりやすく整理されました。指導者が「良かれ」と思って行う言動であっても、関係性や文脈によっては相手を追い詰めることがあり、指導のあり方を常に振り返る必要があることが共有されました。

第 1 部を通じて、多様化する時代において、指導医に求められるリーダーシップは、単に知識や技術を伝えることにとどまらず、相手の成長を支え、安心して学べる環境をつくる姿勢そのものであることが確認されました。

第 2 部　DE&I のなかで愛ある若手指導の叡智を探る

若手のやる気と可能性を ON にするための 3 ステップ：昭和型ティーチングからのバージョンアップ

第 2 部では、国際医療福祉大学の大家基嗣先生、新潟大学泌尿器科の星野さや香先生の座長のもと、一般社団法人日本メディカル NLP＆コーチング協会理事長の十河剛先生より、「若手のやる気と可能性を ON にするための 3 ステップ：昭和型ティーチングからのバージョンアップ」と題してご講演いただきました。参加者は約 40 名でした。

講演では、従来の「背中を見て盗め」に象徴される昭和型ティーチングを、言語化と体系化を欠いた徒弟制度的な教育モデルとして整理したうえで、若手指導において必要となる基本姿勢が示されました。特に、いきなり指導や修正に入るのではなく、まず相手の世界観を尊重し、相手がどのように状況を受け止めているのかを理解することの重要性が強調されました。

若手のやる気と可能性を引き出すための 3 ステップとして、ペーシング、ラポール、リーディングが紹介されました。相手に合わせ、信頼関係を築き、そのうえで望ましい方向へ導くという流れは、医療現場における若手指導だけでなく、患者対応やチームマネジメントにも応用可能な考え方として共有されました。

また、相手の言動の背後にある「肯定的意図」に目を向けること、相手の意見の良い点を 3 つ伝えたうえで“How”の質問を用いることなど、明日から実践できる具体的な

コミュニケーション技法も紹介されました。単に誤りを指摘するのではなく、学習者が自ら考え、気づき、次の行動につなげられるよう支援することが、これからの若手指導に求められることが示されました。

第 2 部は、講義だけでなくワークも交えながら、若手を萎縮させるのではなく、やる気と可能性を引き出す指導のあり方を学ぶ貴重な機会となりました。

第 3 部　日本外科教育学会共同企画

「愛で伴走し、叡智で導く」

―泌尿器科手術教育を考えるワークショップ―

第 3 部では、日本外科教育学会との共同企画として、「愛で伴走し、叡智で導く ―泌尿器科手術教育を考えるワークショップ―」を開催しました。北海道大学腎泌尿器外

科の安部崇重先生が座長を務め、名古屋大学泌尿器科の木村友和先生より趣旨説明およびミニレクチャーが行われました。

ファシリテーターとして、名古屋市立大学泌尿器科の岡田淳志先生、聖路加国際病院泌尿器科の新保正貴先生、札幌医科大学泌尿器科／医療安全・病院管理学講座の西田幸代先生、金沢大学泌尿器科の野原隆弘先生、北海道大学泌尿器科の今雅史先生が参加し、最後に日本泌尿器科学会教育委員会委員長／名古屋市立大学の安井孝周先生より総括のご挨拶をいただきました。参加者は約 40 名でした。

本ワークショップは、働き方改革による時間制約、学習者の多様性、AI の進展など、医師育成を取り巻く環境が大きく変化する中で、泌尿器科における手術教育をどのように継承し、発展させていくかを考えることを目的として企画されました。泌尿器科医は増加傾向にある一方で、ロボット支援手術やがん薬物療法の高度化により、学ぶべき領域は日々拡張しています。こうした状況の中で、これまでの方法だけでは後進にうまく伝わらない時代になっているという問題意識が共有されました。

木村先生のミニレクチャーでは、認知的徒弟制、BID、安全な自律性、フィードバックなど、外科教育において重要となる考え方が概説されました。その後、参加者は少人数グループに分かれ、各施設での手術教育の実践、工夫していること、困っていることについて意見交換を行いました。各グループでは、手術をどの段階で任せるか、どのように支援量を調整するか、術後の振り返りをどのように行うかなど、実践的なテーマについて活発な議論が交わされました。

日常の手術教育では、「どこまで任せてよいか迷う」「手術を任せた際にヒヤッとした経験がある」「強く指導するとハラスメントと受け止められないか不安がある」「若手の反応が以前と違う」といった悩みが少なくありません。今回のワークショップでは、こうした現場の“もやもや”を可視化し、参加者同士で共有することにより、明日から使える具体策を検討する場となりました。

議論を通じて、手術教育は単に「見て覚える」「やりながら覚える」ものではなく、学習者の到達度や手術の難易度に応じて支援を調整しながら、段階的に任せていくプロセスであることが確認されました。デモンストレーションを見せる、実際にやらせる、必要に応じて介入する、術後に振り返りと言語化を行う、といった一連の支援を通じて、若手医師が自ら考え、次の行動につなげられるようにすることが重要であるとの認識が共有されました。

また、質の高いフィードバックの重要性についても議論されました。何が良かったのか、何を改善したほうがよいのか、次にどうすればよいのかを具体的に伝えることは、手術手技の向上だけでなく、学習者のモチベーションを支えるうえでも重要です。若手医師が「自ら選択し決定している」「能力を発揮できている」「周囲と良好な関係の中で学んでいる」と感じられる教育環境を整えることが、幸福感や高いパフォーマンスにもつながることが確認されました。

今回のワークショップでは、指導医側の視点だけでなく、若手医師の視点が同じ場に加わったことも大きな意義でした。若手医師の率直な意見に触れることで、指導する側だけでは気づきにくい受け手側の感じ方や困りごとが明らかになり、手術教育を双方向の営みとして捉え直す機会となりました。手術教育は、技術を一方的に伝える場ではなく、指導医と若手医師が互いの立場を理解しながら、信頼関係の中でともに成長していく過程であることを、参加者全体で共有することができました。

第 3 部は、価値観の共有と指導文化の更新を通じて、泌尿器科手術教育の持続可能な次の一歩を考える貴重な機会となりました。今後も、愛をもって伴走し、叡智をもって導く手術教育のあり方を、日本泌尿器科学会全体で考え続けていくことが期待されます。

おわりに

本企画全体を通じて、ダイバーシティ推進は、単に属性の多様性を尊重することにとどまらず、教育、リーダーシップ、手術指導、組織文化のすべてに関わる課題であることが確認されました。

多様化する時代において、次世代の医師をどのように育て、どのように伴走し、どのように組織として支えるのか。本企画が、各施設における指導と対話を見直す一つの契機となれば幸いです。